

今回、初めて参加したこの研修の目的は、スウェーデンの歯科医療哲学を現地に行って直接肌で感じとることにより、自分自身の歯科医療哲学を構築し強固にすることでした。

「予防する。」と一言で言っても、それが一体どういうことなのか、まだまだ理解していない感覚が正直ありました。まずは自分自身に行動変容が起こること、それが理解への一歩だなと感じました。

5日間のカリオロジーとペリオドントロジーの集中講義、そしてスウェーデンにおける歯科医療の現状の説明の中で、講師の先生方の常に「人」に焦点を当てた話の仕方が印象的でした。カリオグラムを用いた患者への説明のところで、「まずは患者さんの話に耳を傾けて下さい。」「患者自身が変化を見つけるのです。我々（術者）はただそばにいるだけ。」と P Carlsson 先生がおっしゃった言葉が特に強く記憶に残っています。「カリエスは患者の協力が得られれば、その時からすぐ予防できる。」と D Ericson 先生がおっしゃったかと思うのですが、要は患者の行動変容をどう促すのか、知識をただ授けるだけではいけないし、我々術者もただ知識を入れるだけでは結果は出ず、患者へのアプローチ方法について自分を見直す必要があるなと思いました。

スウェーデンのキャピテーションシステムの話で興味深かった点は、リスクと患者の治療費が明確に結びついている点でした。日本の先を進んでいるスウェーデンですから、いずれ日本にも同様のシステムができるかもしれませんし、それを作る核になるのはこの研修会に参加した人たちかもしれません。まずは自分にできることから、と考えると自院のデータをしっかり採り、そこから何が見えてくるのかを考えることから始めようと思いました。

研修が終わって数日が経ち、日々修復治療をする中である日、講師の誰かが言われていた「修復は fill しているだけで、病態の予防をしているのではない。」という言葉がストンと落ちました。今まさに修復治療をしようという時に、握っていたタービンを置いていました。そして担当の歯科衛生士を呼び、予防プログラムを再度確認しました。

今、目の前にいる患者さんにとって本当に意味のある診療とは何か？

このカリエスが、いったいどのくらいのスピードで進行しているのだろうか？カリオロジーの本を読んだだけではあまり変わらなかった自分の意識が、スウェーデンに趣いたことで変わりつつあるのを感じました。今までとは思考のパターンが少し変化した、病態を違った角度から見ているような感じです。患者さんの真の利益とは何か、をようやく本当に考え始めたマルメ研修でした。